

戦後日本における人口論の形成

—南・市原両教授のマルサス人口論に対する所論を手掛かりにして—

The Formation of a Theory of Population in Post-war Japan: in Relation to How Prof. Minami and Prof. Ichihara Contributed to the Study of Malthus' Essay

柳田 芳伸 (長崎県立大学・名誉教授)

Yoshinobu YANAGITA (Emeritus Prof. at Univ. of Nagasaki)

本報告では、我国の経済学部において、名実共に最初に人口論の講義を担当した南亮三郎(1896 - 1985)と市原亮平(1926 - 1982)によるマルサス人口論に関する逸し難い学績を中心として辿りながら、両氏がどのような人口論、あるいは人口学(demography)の構築を企図しようとしていたのか、その大筋を明らかにし、そこに残されているであろう課題を抽出、呈示してみたい。図らずも、このことは戦後日本における人口論の形成史の不可欠な一幕を振り返ることになるろうし、また同時に余りにも専門分化されているように見える人口研究の現状を問い直さんとされる際の一助にもなるかと考える。

南が中央大学で人口論を開講したのは1952年8月のことであり、市原が関西大学で人口論の講義を開始したのは1954年4月からである。まずは大学在学時以降担当に至るまでの両氏の前歴を一瞥しておく必要がある。小樽高等商業学校(1916年4月入学)で大西猪之助(1888 - 1922)教授に邂逅した南は、続いて東京商科大学(1920年4月入学)で左右田喜一郎(1881 - 1927)から薫陶を受け、以後1923年4月から1948年7月まで母校小樽高商で経済原論、商業、社会政策などの科目で教鞭をとった。着任時には、大西の雄姿を最早見るとは適わなかったけれども、南はその在学時や在職時に黙過できない多くの出会いをなしている。そのうちここでは、大熊信行(1893 - 1977)、郡菊之助(1897 - 1987)との縁に着目したい。大熊とはすれ違いではあったけれども、南の目をF.エンゲルス(1820 - 1895)の生命の再生産論に向けさせる契機になっているように推されるし、郡の方は蜷川虎三(1897 - 1981)に論陣を張った統計学者で、南の統計学観に少なくない影響を与えているように卑察される。それに、過剰人口論という観点に立つなら、1949年4月～1953年3月の北海道道立労働科学研究所所長時代の南もお座なりにできないかもしれない。

上の経歴にもまして、南が小樽時代に『人口法則と生存権論』(1928)を嚆矢にして、着実に豊富化していったマルサス人口論を中軸とした重厚長大な人口論研究は学位論文『人口原理の研究』(1943)に結実していったことは改めて言うまでもない。そしてそれは紛れもなく人口論の開講当初の基盤となっている。併せて、『人口原理の確立者』(1944)を付加するなら、南のマルサス人口論研究の大元もほぼ戦前期に根を降ろしていたと目しても過言ではないと言えよう。

他方、頓死した市原の仔細な履歴を伝える資料は鮮少である。京都大学経済学部時代（1947年4月～1950年3月）にあつては、並々ならない渾発さや博覧強記振りを発揮していた。それは学生サークルであつた社会科学研究会（1946年創設）が主催していた資本論研究会（1947年10月～1948年2月）や唯物論研究会、あるいは労働運動史研究会の場で如何なく流露された。その際の指導者が名和統一（1906 - 1978）から松井清（1912 - 1972）へと引き継がれたこともあり、松井ゼミに所属し（1948年4月～1950年3月）、卒業後は助手として大阪市立大学経済研究所研究員（1950年4月～1953年2月）を務める傍ら、京都大学経済学部大学院において岸本英太郎（1914-1976）助教授等の下で研鑽した。この間の1成果が出口勇藏（1909 - 2003）・堀江英一（1913 - 1981）による監修下での共訳書、M.ドップ（1900 - 1976）著京大近代史研究会訳『資本主義発展の研究Ⅰ・Ⅱ』（1954 - 1955）である。その延長線で、絶対主義としての天皇制が明治期から終戦に至るまで跋扈し続けたとする観点から日本近代史を見詰め直す一方で、例えば、鐘淵紡績で辣腕を振るったりベラリスト武藤山治（1867 - 1934）について焦点を合わせたりもしている。それゆえ、関西大学就任時（1953年4月）の担当科目は英文経済書・独文経済書にとどまっていたものの、翌年から農村の相対的過剰人口の実証研究に取り組むと共に、一気呵成に『人口論概説』（1955）を書き上げ、かつ間髪を置かず逐次的に日本近代人口論史の諸相を細大漏らさず掘り下げ、自らの人口論の色合いを旗幟鮮明にしていった。

報告では、大略、上記のような基線をもった両雄の人口論を以下のような項目において比較照合してみたい。Ⅰ．マルサス人口論に対する所論の根本的差異、特に南の教え子でもあつた吉田秀夫（1906 - 1953）によるマルサス研究の評価をめぐる対立、Ⅱ．言わば、人口論の老舗総合百貨店（南）と後発の特殊専門店（市原）との攻防、とりわけ S.クーンツの『人口理論と経済的解釈』（1957）に対する賛否、Ⅲ．両者の生命の再生産論と計画生態（planned ecology）論、Ⅳ．両教授の政治算術派への熱き眼差し。Ⅰ及びⅡは対比であるけれども、Ⅲ及びⅣについては、奇しくも共通理解も隠見しているように思っている。